

## 松根油採取痕が残る松 戦争の生き証人

虹の松原では、松の幹に今も残るV字形の傷跡は太平洋戦争末期、航空機ガソリンの原料として松脂とるためのものであった。傷跡が鮮明に残っているものや、よく見ないと分からないくらい自力回復しているものもある。また傷は残っていないが木の皮がはがれているものは、その名残りである。

松から採る油を「松根油」といい、松根油をとる方法として、幹に傷つけて松脂をとる方法と、松の根を掘り起こし、チップ状に刻み、蒸し焼きにして気化したガスを冷却して液化して、松根原油をとる方法があった。

傷あとが残っている松は平成16年4月現在で約60本確認されており、今も戦争の無言の語り部となっている。



昭和16年12月 太平洋戦争開戦、緒戦より南方の石油産地を確保し、施設を修復して石油生産を始めた。石油の内地送還量

は、当初は順調だったものの、戦況の悪化とともに、激減し昭和20年3月以降途絶えた。

南方からの石油輸送が激減したわが国は石油政策を転換した。それは「南方石油資源の内地送還は、考慮せず」で、石油代替計画を提出した。

この計画では・ガソリンとアルコールの混合燃料・純アルコール燃料・生ゴムからの潤滑油精製・植物油蒸溜（大豆ひまわりの実等）等々検討されたが「松根油からの石油精製」が有望視された。

早速、海軍 農商省等で調査し、松根の埋蔵量（推定）は全国750万トン採油量（推定）100万KL（本土年間消費量の1/3に該当）と試算され「松根油からのガソリン生産計画は可能」と結論づけられた。「200の松根で1機の航空機が1時間飛べる」との標語のもと計画がたてられた。

老若男女、学生、児童まで動員され、松の根掘り、松脂とり、蒸溜釜までの運搬等にあたった。航空機ガソリンとして約500KL製造されたようであるが、実際の使用記録は残っていない。